

比喩とコミュニケーション

五十嵐 海 理

1 はじめに

日常的に交わされる言葉のなかには、文字通りでない意味を解釈として要求するものが多い⁽¹⁾。例えば、2006年1月10日の読売新聞の一面を見てみよう。最初の記事のリードにある最初の文を引いてみる。

- (1) 法務省は、留置場や拘置所に拘置中の容疑者や被告（未決拘禁者）が、弁護士と電話で連絡を取る「電話接見」を認める方針を固めた。

（『読売新聞』2006年1月10日付朝刊（新潟地区））

最後の「固めた」は文字通りの意味で使われていない。「固める」のもともとの意味は「柔らかい物や液状の物などを固体状に変化させる」（『明鏡国語辞典』）であるが、(1)では「しっかりとゆるぎないものにする」（同）という比喩的に派生された意味で使われている。新聞のような、散文的な情報伝達（コミュニケーション）でも、比喩は使われている。

比喩というのは、何かを何かで喩えることである。例えば(2)では、どのような比喩が使われているか、全て指摘できるだろうか。

(2) 「冷房」 安藤忠雄

風に個性があることを、今の子供たちは知っているのだろうか。四季折々に、あるいは朝昼晩と刻一刻、風はその顔を変える。

私は、大阪の下町に生まれ育った。子供の頃は、木造の長屋に住んでいた。辺りはまだ僅かに戦後を引きずっていた時代だったから、冷房など当然なかった。それでも十分に快適に暮っていたように思う。

冬、建て付けの悪い戸の間から忍び込む隙間風は、冷徹で憎々しげな顔をして、私を苛立たせた。風が急に優しげな表情になるときがある。そんな日が多くなると、季節は春。うららかな風は、時に花の甘い香りを運んでくることもあり、冷たい風とはうって代わって、私を和やかな気持ちにさせた。

（瀬戸（2002）より引用）

このように、比喩は、人が人と言葉を交わすときによく用いられる。文字通りでない、嘘のような言葉を使っているなどと言うと、驚くかもしれない。しかし、本当である。例えば、何かの予約があって、その予約の時間になると、「あ、予約の時間が来た」という発話がなされることもある。「来る」という言葉はふつう「彼が来た」「電車が来た」というように、具体的に目に見える物や人について使う。時間は目に見える具体的な物・人ではないので、喩えでしか表せない。時間について文字通りの表現は存在しない。従って、時間について話すたびに、私たちは比喩を使っていることになる。

本稿は、比喩について言語学の観点から紹介することを目標とする。また、4節では、言葉の分析から離れて、比喩の思わぬ社会的効果について述べる。その前に、比喩をもう少し大きな文脈で捉えるため、2節で「修辞学」という言葉を簡単に振り返る。

2 修辞学 (レトリック rhetoric)

周知のことだが、古代ギリシアでは上手く演説するための方法が考え出された。それが弁論術、つまり修辞学である。修辞学は中世になってヨーロッパでまとめなおされ、中世には大学教育の基礎の三科(文法・論理・修辞)のひとつとなった⁽²⁾。それが英語やフランス語で言うレトリックである。ロラン・バルトがまとめたものを(7)に示す。

(7) 修辞学 (レトリック rhetoric)

1. INVENTIO (発見) いうべきことを見出す
2. DISPOSITIO (配置) 見出したことを順序だてる
3. ELOCUTIO (表現法) 言葉の装飾、文彩を加える
4. ACTIO (行為) 役者のように弁論を演ずる、身振りと言葉
5. MEMORIA (記憶) 記憶力に頼る (Barthes (1970))

1番目は「発見」で、まず話の種を探すわけである。2番目の「配置」は、発見した内容をどのように展開させて、説得的な演説につなげるのかを扱う部門である。3番目の「表現法」の後に、「言葉の装飾」と「文彩」と書かれている。言葉を飾り、文章を彩ることである。そのために使う言葉の装飾や文章の彩のひとつが比喩である。そうして出来た文章を、4番目の「行為」で身振り手振りを付ける。文章をしっかりと「記憶」して、演壇に立って話す。古代ギリシアや中世ヨーロッパではこうしたことが教えられていたが、現在、修辞学の研究といえば、「表現法」を研究することを指すことが多い。本稿でも、「表現法」のうち、文字通りの意味が転じる「比喩」の中でも代表的なものを三つ取り上げる。

3 言葉の装飾・彩：三種類の比喩

この節のタイトルのように、主な三つの比喩を取り上げて言語学の観点からの分析を紹介する。

3.1 隠喩（メタファー metaphor）

1節で検討した安藤忠雄の文章に使われている比喩、つまり「風はその顔を変える」の比喩と「甘い香り」の比喩であるが、これらは隠喩（メタファー）という比喩である。隠喩は「比喩の中の女王」と呼ばれ（これも隠喩であるが）、比喩の多くはこれである。流行言葉にもみられ、たとえば、定年退職後の夫が妻と四六時中行動を共にしたがる場合、その夫のことを「濡れ落ち葉」と言うが、これも隠喩である。隠喩は翻訳不可能といわれることもあるが、谷口（2003）が指摘するように、英語から直接、日本語に翻訳しても同じ解釈を容認するメタファーもある（8b）－（8c）。（8a）に示されるように、時間的にも遡ることが出来る。

(8) 「人生は旅である」という隠喩

- a. 人生は百代の過客にして、行き交う年もまた旅人なり。 (松尾芭蕉)
- b. I'm at a crossroads in my life.
- c. 私は今、人生の岐路に立っている。 (谷口 (2003))

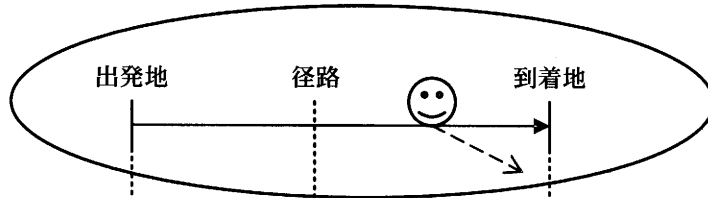
「人生は旅である」という比喩は、人生は旅に似ている、ということに注目して、人生の話をする時に旅に喩える。これを先ほどと同じような図にすると、(9)になる。しかし、これでは、旅人はどこにいるのか、また岐路はどこにあるのか、表示されない。



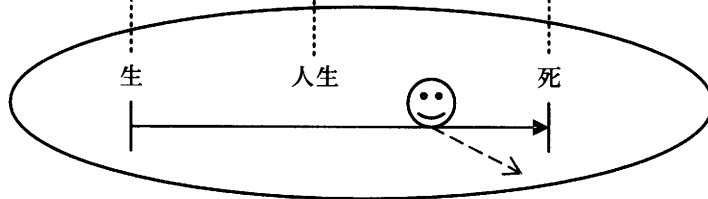
この「似ている」という類似性の感覚を明示的に示すことで、「旅人」「岐路」などの比喩も理解できるようになる。ここで、説明のために新しい用語と図を導入する必要がある。(10)をごらんいただきたい。

(10)

喩えるもの(「旅」)
(起点領域)



喩えられるもの
(「人生」)
(目標領域)



(10) で示されるように、「旅」で人生を喩える場合、旅の持っている特徴も人生のほうに写像される。旅とは、出発地と到着地があり、その間を人間が移動することであるから、人生を「旅」に喩えれば、旅の持っているこうした特徴がそのまま人生の特徴となる。人生にも出発点と到着点があり、それらは生と死に対応し、その間の径路を人間が歩いて行くものと捉えられる。

松尾芭蕉の場合 (8a)、旅は徒歩旅行だと考えておけば、過ぎて行く年は、人間が人生の終着点に向かって歩いていくうちに毎年、通り過ぎて行くものである。過ぎて行く年は自分以外の旅人に喩えられる。人生が過客であるというのは、旅で道行く人々と擦れ違うのと同じ様に、人生の年月は自分の横を過ぎて行くものだということである。では、「人生の岐路」はどうだろうか。旅の道中に分かれ道があって、右に行けばいいのか、左に行けばいいのか、悩むような場合がある。同様に、人生において2つ選択肢からどちらを選ぶか決めなければならない時期ということである。(10) では、径路から出ている点線の矢印と、実線の矢印との分岐点で表現している。

このように隠喩は2つの異なる「領域」と呼ばれるもの間の対応関係に依存している。領域とは、おおむね、ある言葉を聞いたときに繰り返し現われるパターンであると考えられる。「旅」という言葉を聞いたり言ったりすれば、私たちの心の中では、旅というものの概念として、出発地、径路、到着地というパターンが現われる。こういうものが頭の中に実際にあるのかどうかは措くとして、心理学や認知科学で比喩にちかい「類推」と呼ば

れる過程では「ベース」「ターゲット」という同様の理論装置を使うことから、(10)の2つの領域の対応関係をメタファーの基本的な原理と考えることは妥当である⁽³⁾。

2つの異なる領域の対応関係が隠喩だとすると、(11)のように起点領域の特徴を目標領域にもっと広く対応させた例も存在する。

(11) 鴨長明『方丈記』より

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世中(よのなか)にある人とすみかと、又かくのごとし。(瀬戸(2002)より引用)

(11)で、最初の文は河の流れを、そして2番目の文は河の水面に浮かぶ泡のことを述べている。そして、3番目の文で、河の流れと泡を人生に喩えていることが分かる。ここでは河のイメージが起点領域で、人生が目標領域になる。しかし、瀬戸(2002)も指摘するように、このような対応関係は2番目の文まででは分からない。このように、目標領域に対応する表現がなかなか出てこない、連続した隠喩、連続したメタファーを、諷喩という。同じ様な隠喩の連続は(12)のようなことわざにも見られる。(12a)では猿が木から落ちることを、(12b)では名人が巧みであるはずのことに失敗することに対応させている。

(12) a. 猿も木から落ちる

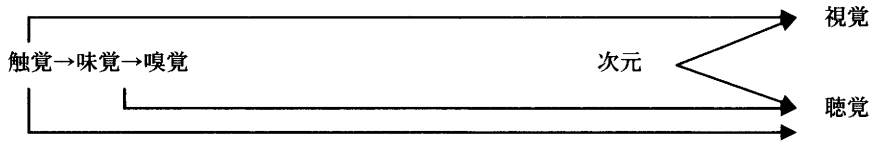
b. 犬も歩けば棒に当たる

3.2節では隠喩の中でも1節で取り上げた「甘い香り」のような隠喩を紹介する。

3.2 共感覚表現 (シネスシージャ synaesthesia)

共感覚表現とは、1節で指摘したように、味の言葉で匂いや声や音を修飾する「甘い香り」「甘い声」「甘い音色」など、ある感覚に属することを他の感覚で表現する隠喩である。人間には五感というように五つの感覚(視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚)がある。これらの感覚の1つを言い表すのに他の感覚の表現を使うとすると、20通りの可能性がある。Williams(1976)は通言語的調査を行い、実際に現われる可能性のあるものが20通りではないことを示した。(14)に実際に出現する例を挙げる。

(13) ウィリアムズの共感覚表現の表



ウィリアムズの例⁽⁴⁾

- (14) 触覚→味覚： sharp taste 鋭い味
- 触覚→視覚： dull colors 鈍い色
- 触覚→聴覚： soft sounds 柔らかい音
- (15) 味覚→嗅覚： sour smells すっぱい匂い
- 味覚→聴覚： dulcet music 甘美な音楽
- (16) 次元→視覚： flat color 平板な色
- 次元→聴覚： deep sound 深い音色
- (17) 視覚→聴覚： bright sounds 明るい音色
- 聴覚→視覚： quiet colors 静かな色彩

(14) ～ (17) には、日本語としては慣用的とはいええない例も含まれているが、理解できないものではない。したがって、共感覚表現は英語と日本語にまたがって同じように用いられると言える。人間の持つ感覚は言語によって左右されないから、こうした表現が言語を超えて利用可能であるのだろう。

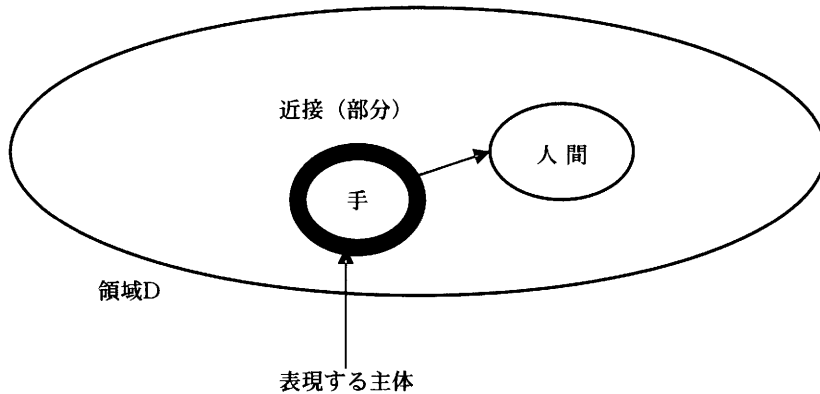
3.3 換喩 (メトニミー metonymy)

換喩とは、ひとつのものを言うのに、その近くにあるもので表現することである。ここで先ほどの隠喩との違いを確認しておこう。隠喩は2つの異なる領域の対応関係である。これに対して、換喩は同じ領域にある（近接した）2つのものの対応関係である。例えば「手が足りない」という時に、手は人間自体を指す。つまり人間を指すのに、その一部である手だけを取り出して、それで代表して表現する。このように、あるもの（ここでは、ひとりの人間）を言い表したいときに、同じ領域内（人体）で近くにあるもの（手）でそれにかえることを換喩と言う。これは (18) のようにまとめられる。

- (18) 隠喩→類似関係に基づく比喩
- 換喩→近接関係に基づく比喩

同じ領域の中にある近接関係に基づく比喩である換喩を（19）のように図示できる。

（19） 「手が足りない」の「手」⁽⁵⁾



「手が足りない」時というのは、仕事をしていて、人員に対して仕事が多すぎる時であろう。実際には人数が足りないのだが、仕事をする時はふつう手を使うことから、手が目立つ。その目立つ「手」を言って、人間を意味させる。それが換喩である。人間を表すのに人体の他の部分を使うことも出来る。「頭数をそろえる」という場合、頭は人間を表している。また、「やかんが沸いた」もそのままではおかしい表現で、文字通りには解釈できない。沸いたのは「やかん」ではなく、やかんに入っている「水」であるから、本当は「水が沸いた」のである。しかし、やかんの中に入っている水は外から見えない。見えるのはやかんである。だから目立つ「やかん」で中身の水を表現して「やかんが沸いた」と言う。さらに、江戸時代の「飛脚」は飛ぶ脚と書く。「飛ぶ」は「飛ぶように走る」という直喩から「速く走る」ことを意味する隠喩だろう。しかし「飛脚」は「速く走る脚」ではない。「飛脚」は、「急を要する書類・金銀などの小貨物を配達する人夫」（大辞林²⁾）である。脚で人を表すから、ここは換喩である。さらに（20）をごらん頂きたい。

（20） 春雨や ものがたりゆく 蓑と傘

蕪村

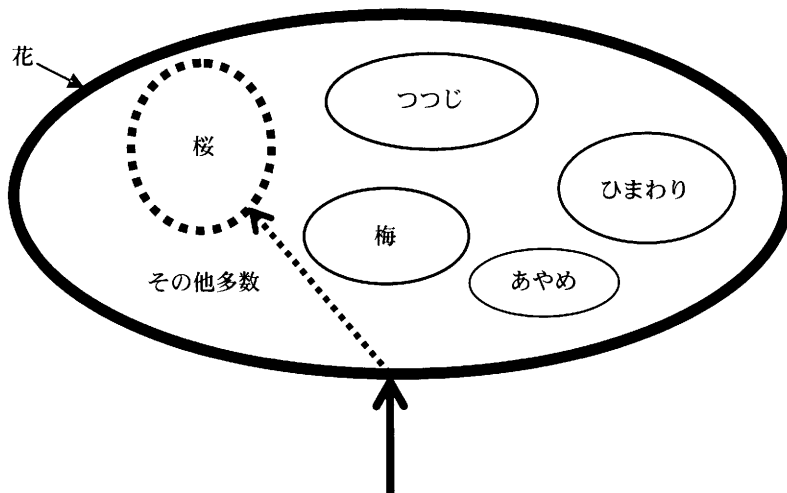
（瀬戸（2002）から引用）

2人の人物が、話をしながら春雨の中を歩いて行く。ひとりが蓑をかぶり、もう一人が傘をさしている。その2人を言い表すのに、彼らの身につけている（つまり近接関係にある）雨具で代表させている。

「やかんが沸いた」は入れ物で中身を表す換喩だったが、中身で入れ物を表す換喩は少

その一種の「桜の花」を指している。これは梅の花を観賞する場合、「花見」とは言わず、「梅見」ということと対照を成している。(24) をご覧頂きたい⁽⁹⁾。

(24) 「花見」の「花」



類と種の関係になっている2つのものを利用した比喩が提喩である。これが換喩と提喩の違うところである。

(25) 換喩→近接関係に基づく比喩

提喩→類と種の関係に基づく比喩

類と種の関係は近接関係と似ているように見える。先ほどの(19)と(24)を見比べると、どちらも同一領域内の他の部分や種類をさす比喩となっている。しかし換喩では、部分と全体の関係になっていても、それはあくまで近接関係であるが、提喩における部分・全体の関係は種類の関係であって、お互いの物理的距離が近い必要はない。たとえば、換喩の「やかんが沸いた」というときの「やかん」はその中身(ふつうは湯)を指すが、湯はやかんの種類ではない。それに対して、提喩の「花見」という時の花は、桜だが、桜は花の一種で、花は桜の上位類である。

提喩という聞きなれない比喩が日常的に使われることを示す例をさらに追加する。

(26) a. 今日は天気だ 天気→良い天気(良い天気は天気の種類)

b. 到底将来見込みのある人間ではない 見込み→良い見込み

(瀬戸(2002)から引用)

こうした日常的に使われる提喩の延長線上に(27)のような文学作品における提喩がある。

(27) お この重圧する

おほきなまつ黒の集団
波のおしかへしてくるやうに
重油の濁つた流れの中を
熱した銃身の列が通る
無数の疲れた顔が通る。
ざつく、ざつく、ざつく、ざつく
お一、二、お一、二。

(萩原朔太郎「軍隊」)

(佐藤(1992)からの引用)

「おほきなまつ黒の集団」は類の表現である。「おほきな真っ黒の集団」はいくらでも考えられる。クラブの黒服の集団や、リクルートスーツの一団も、見ようによっては大きな真っ黒の集団であろう。しかしここでは、題名もさることながら、「熱した銃身の列」、「無数の疲れた顔」、「ざつく、ざつく、ざつく、ざつく」という足音、「おいちに、おいちに」という掛け声といった他の描写から、自然に「軍隊」の不気味な集団を思い描いてしまう。このように、「軍隊」と言わなくても、軍隊の不気味さを思わせるのが提喩の力である。

4節では、このような比喩の劇的な効果を、病気に付随する隠喩を中心に見て行きたい。

4 比喩の効果

3節まで言葉を効果的に使う方法として比喩を紹介してきた。比喩は文字通り表現するよりも物事をかえって正確に、効果的に表現することもあり、時間や人生など比喩でしか表現できない例もあった。しかし、比喩を使うことで、物事がかえって正確に伝わらない場合がある。たとえば、病を語る場合に比喩を用いることで、さまざまな誤解が生じることがある。病にある人を深く傷つけることもある。そのことをもっとも雄弁に語ったのが、本人もガンになった経験を持つ、(昨年亡くなった)アメリカの文芸批評家スーザン・ソントグ(Susan Sontag)である。周知のように、西洋では18世紀以降、結核と癌が主要な病気であった。(28)では結核の比喩についてソントグが例を交えながら説明している。

(28) 結核の神話と癌の神話の類似のうちで最も眼につくのは、この2つとも情熱に縁のある病気と理解されている(されていた)点である。結核の場合、外にあらわ

れる熱は内なる燃焼の目印とされた。結核患者とは情熱に、肉体の崩壊につながる情熱に「焼き尽くされた」人とされたのである。結核の隠喩はまず愛を描くの
に利用された——「病める」愛とか、「焼き尽くす」情熱といったイメージがそれ
であるが、これはロマン主義運動の始まるずっと前のことである。それがロマン
主義以降になると、このイメージが逆転して、結核のほうが恋の病のひとつの形
と考えられるに到る。…（中略）…『魔の山』の或る人物の説明するところでは、
「病気の徴候といっても、じつは愛の力が変装してあらわれたものにすぎない。
病気とはすべて愛の化身にすぎない」。

(Sontag (1977))

このように、結核は内なる激しい感情の表出であるとされた。そして逆に、結核を患って
いる人は、激しい感情を持ち、病気はその発現と考えられ、詩人や恋人は結核患者のよう
な、痩せて火照ったような顔つきがふさわしい、あるいは性的魅力がある、とされた。そ
うした情熱が身体を焼き尽くすように、結核患者はやせ細って行くというわけである。結
核 (tuberculosis) は英語でconsumptionともいうが、これは「消費」を意味する。生
きるエネルギーを費やしてしまう情念の病気が結核だというわけである。病気に関するこ
のような思い込みは、『魔の山』からの引用である「病気とはすべて愛の化身にすぎない」
という隠喩によって明快に示される。2節の用語では、病気が目標領域、人を愛することが
起点領域になるだろう。

しかし、ソントグによれば、このような病気の隠喩のおかげで、結核患者は感受性の強
い、想像力に富む、孤独な人間と考えられ、こうした芸術家的性質を持つ人間と結核患者
は同じと見なされるようになり、19世紀以降、芸術家があちこちと生活の場を移すように、
結核患者は転地療法と称して空気の良いところを求めてさすらいようになった。結核の治
療に転地は効果なかったが、そうした治療が、結核菌が発見され20世紀半ばに治療薬が開
発され科学的な治療が行われるようになるまで続けられた。その意味で、結核についての
比喩は、嘘をついたといえる。

(29) ではソントグが癌の比喩について説明している。

(29) 癌の神話によると、たいがい何らかの感情の噴出がたえず阻止されるのが原因で、
この病気にかかるのだという。昔、この空想がまだ楽観的な形を取っていた頃には、
抑圧の対象となるのは性的な感情であるとされていたが、昨今ではそれが大
変化して、激しい感情の抑圧こそ癌の原因とされている。 (Sontag (1977))

今でも、特定の性格の人は特定の病気に罹りやすいと、しばしば話題になる。これは、19

世紀半ばのボストンの或る医者が「良性の乳がんと思われる人々には朗らかにしているのが効く」と助言していたことと、奇妙に符合する部分がある。

そして、「癌」は人間以外のもの、社会のさまざまな集団や利害の対立する相手を描写するために使われるようになる。ソntagは1920年代に共産主義を批判するマリネッティの言葉を引く。

- (30) 共産主義とは人間を荒廃させてきた官僚制という癌が悪化したやつだ。ドイツ産の癌だ、ドイツ特有の、安息の前には汗を流そう主義の産物だ。

(Sontag (1977))

実際、『明鏡国語辞書』を引くと、癌は「① 悪性の腫瘍」という意味のほかに、「② 機関・組織などの内部にあって、運営などの障害となるもの」という意味が載っている。②は隠喩である。Proctor (1999) が指摘するように、ドイツでも、ナチスが「癌」という病名を望ましくない者を指して使った。

- (31) ガンがしだいに増加していくなか、悪性腫瘍がうってつけの隠喩として、ナチスの見解から望ましくないすべてのものに烙印を押すべく用いられたのは、当然といえば当然だろう。ヨーゼフ・ゲッベルスは、ユダヤ人・同性愛者のみならずイギリス外務省やスターリンの共産主義帝国等、軽蔑の対象に対し、「ガン」「悪性腫瘍」という言葉を日常的に使った。もちろんこうした言葉遣いをしていたのはドイツだけではなく、たとえば一九三五年にアメリカで発行されたある優生学の入門書は、遺伝的欠陥をもつ人間は「国家のガン」であって、優生学会とはすなわち「社会のガン対策学会」なのであるとしている。(Proctor (1999))

(31) のような非人間的な比喩が、戦時下とはいえ、前世紀の一時期に「日常的に」使われていた。こうした(比喩的な)考え方の行き先は、歴史が示している。

またソntagによれば、流行病が神の怒りなどの人間の罪に対する判決、または個人や人間社会全般の放埒な生活の報いであるという比喩は昔から行われている(Sontag (1988))。エイズが初めて流行った時に、同じ様な言説が繰り返された。不特定多数の性的に放埒な人々と関係を持ったことの自業自得だとか、人間の極端な欲望に対する警告だ、などである。しかし、輸血からでもエイズに罹るかもしれないことが分かったいま、この言葉を繰り返すことはできない。

このように、比喩は、人の思考に入り込み、恐ろしいことを言わせることもある⁽¹⁰⁾。

5 まとめ：比喩とコミュニケーション

本稿では、1節では、人が日常的に行っているコミュニケーションには、比喩が頻繁に出てくることを示した。2節では、より大きな修辞学の枠組みで比喩をとらえ直した。3節では、言語学的比喩研究の概要を三種の比喩について説明した。4節では、前世紀において病気の名前を比喩的に用い、非人間的な扱いを正当化してきた歴史があったことを見た。このように、比喩は抽象的思考から日常会話まで様々なレベルで用いられ、人のコミュニケーションにとって欠かせないものであることが示された⁽¹⁾。近年、言語学では、隠喩における「類似性」の性質の解明や、換喩における転換の語用論的・意味論的分析に注目が集まっており、人間の思考とその伝達についてさらなる示唆を与えることになるとと思われる⁽²⁾。

* 本稿は豊栄地区公民館で2005年7月6日に行われた敬和学園大学公開講座の講演「比喩とことわざの言語学」に加筆修正したものである。拙い講演を聞いてくださり、興味深いコメントを寄せてくださった会場の皆様に感謝する。

註

- (1) もちろん「文字通りの意味 (literal meaning)」を定義することが望ましいが、それが何であるかは、本稿の議論の範囲を超える。例えば、I like you.とといった単純な文でも、代名詞 (I, you) に指示対象を付与する前までが文字通りの意味なのか、それとも付与した上で文字通りの意味と考えるのか、というよく知られた議論も未だに繰り返されている。「論理形式 (Logical Form)」「表意 (Explicature)」「意味表示 (semantic representation)」「概念構造 (conceptual structure)」など、いくつもの候補が考えられる上、定説はいまのところ存在しない。したがって、本稿では、「彼は頭を掻いた」場合の「頭」は<文字通りの意味>で使われており、「何バカなことやってるんだ。もっと頭を使えよ」「彼は頭が良い (悪い)」などの「頭」は「思考能力」のようなく比喩的な意味>で使われている、というような考え方が存在すると仮定しておく。
- (2) この典型的な教科書が有名なクインティリアヌスの『弁論家の教育』(ラテン語ではM. Fabi Quintiliani Institutionis Oratoriae)である。Loeb Classical Library版によると、紀元後35年に生まれ、紀元後100年頃には死亡していたとされるクインティリアヌスのこの本は、15世紀にローマで、17世紀にはライデンで刊行されている。2005年には日本語版が出版されている(森平宇一 他(訳)、『弁論家の教育』 京都:京都大学学術出版会)。なお、古代ギリシアといえばアリストテレスの『弁論術』(岩波文庫)が有名だが、廣川(1984/2005)は、弁論家イソクラテスと彼の学校とそこで教えた修辞学こそが、ヨーロッパが受け継いだ古代ギリシアの教養理念であるという。英語圏においては、18世紀にスコットランドで多くのレトリックの書籍が出版されている。筆者の手元には、Smith, Adam. (1762-3) *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*.やCampbell, George. (1776) *The Philosophy of Rhetoric*. がある。周知のように、レトリック関係の文献は無数にあるため、列挙することは難しい。
- (3) 心理学や認知科学の「類推」については鈴木(1996)を参照。
- (4) もっとも、Williamsの一般化に例外が存在することは瀬戸(2003)で詳細に指摘されている。

- (5) この(19)の図がいわゆる参照点構造 (reference-point construction) の図式であることは明らかであろう。Langacker (1993, 1995) や谷口 (2003) などを参照のこと。
- (6) 【中身で入れ物】を表す換喩として、瀬戸氏は (ある執筆要領で) trashがそうであるという。英語はtake out the trash (ゴミをすてる) のような例では、イギリスなどではゴミの入った大きな入れ物ごと玄関口に出すので、trashが「(ゴミ入りの) ゴミ箱」の意味になる。しかし、日本語では「ゴミに出す」という場合の「ゴミ」は、「ゴミ箱」というよりも、「ゴミの日」ではないかと思う。「ゴミを出す」であれば、「ゴミ箱」からゴミを取り出して出すことである。
- (7) 「筆」は後述の提喩で、ペンなどの筆記用具のことをさす。
- (8) 蛇足だが、「飛脚」について言及したような、隠喩 (メタファー) と換喩 (メトニミー) との相互乗り入れがあることについては、Goossens (1990) が指摘している。それぞれについて例をつけておく。当該箇所は下線で示す。なお、Goossens は提喩 (シネクドキ) を換喩の一種と考えているので、例にはシネクドキと分類されるものも含まれている。
- (i) メトニミーから導かれるメタファー (Metaphor from metonymy)
- "What a coincidence," said coach Marty Schottenheimer with his tongue in his cheek. There was, of course, no coincidence. (「本当のことを言っているわけではないときに、舌を頬に入れておかしな話し方をする (メトニミー: 本心ではないことや皮肉を言うときの話し方をする=本心ではないことや皮肉を言う)」→「本心とは逆のことを言う、皮肉る」)
(例文はwww.cjonline.com/stories/113098/spo_chiefswin.shtml)
- (ii) メタファーから導かれるメトニミー (Metonymy from metaphor) (ほとんど例がない)
- Remarkable, the chap is blowing his own trumpet! (「トランペットを吹く」→「自慢する (メタファー)」→「自慢することの一部としてトランペットを吹く (メトニミー)」最後のメトニミーはほとんどありえないことであるとGoossensも認めている)
- (iii) メタファーの中のメトニミー (Metonymy within metaphor)
- "Trippy, I need a woman." And I wished I'd bit my tongue off. (「舌を噛み切る」→ (メトニミー: 舌=話す能力) →「話す能力をなくす」→「言ったことを後悔する」(メタファー))
また、メタファーの解釈が優先され、メトニミーの解釈は消滅する場合もある
Another aim of the new policies is decentralisation. Previous governments have paid lip service to the idea but achieved little. Perhaps it was too difficult to let the "keys to power" leave Paris. (「口先だけのサービスをする (メトニミー: 唇=話すこと)」→「口先だけの賛辞・好意を示す」(メタファー))
- (iv) メトニミーの中のメタファー (Metaphor within metonymy)
- The trouble was, of course, that among Henry's sort of person, a rugby-playing surveyor, for example, or the kind of dentist like David Sprott who wasn't afraid to get up on his hind legs at a social gathering and talk, seriously and at length, about teeth, he was considered something of a subversive. (「(動物などが) 後ろ脚で立つ」→「(人が) 立ち上がる (メタファー: 動物の後ろ脚→人間の脚)」→「公的な場で立ち上がって自分の主張をする (メトニミー: 立ち上がる=立って主張することの一部)」
- この分類が正しいとした場合、「飛脚」は (ii) あるいは (iv) となると思われるが、全体としては「飛脚」で人を表しており、これはメトニミーであるので、(iv) の一種であると考えられる。このことは、本稿で示しているような、転義現象の単純な3分類がいつも妥当であるわけではないこと

を示している。Goossens (1990: 328-329) も指摘するように (とくに彼のFigure 1 (p. 329) を参照)、けっきょく、ふたつの領域の関係なのか、ひとつの関係の中の要素間の関係なのかを話し手・聞き手が判断することによって、メタファー (隠喩) もしくはメトニミー (換喩) の区別をすることになる。

なお、Goossens (1990) で扱われている分類をさらに明示的にしたものとしては、Ruiz de Mendoza Ibanez and Perez Hernandez (2003) がある。内容を詳述する余裕はないが、隠喩の起点領域あるいは目標領域 (もしくは両方) の中で換喩を認める立場であり、厳密に言えばGoossensの提案とは性質が異なる。

- (9) 蛇足ながら、Yahoo!で検索したところ、「つつじ見」も相当数見つかる。「ひまわり見」「あやめ見」などは皆無である。いうまでもなく、容認されている「梅見」「つつじ見」は提喩ではない。単なる複合語である。
- (10) Proctor (1999) の第二章、とくにpp. 59-65にナチスの比喩の濫用について述べられている。「病氣」を一つの「トボス」と捉え、そのレトリックを検討したものとしては、柳沢他 (2004) の第9章がある。
- (11) たとえば、哲学においては、比喩で概念を分析することがよくある。たとえば、市川 (1978, 1984/1992) において、「身」という言葉が、意味と転義現象をたよりに分析され、自己と他者と心と体などの二分法を超越する、統一的概念であることが示されている。
- また、筆者は未見だが、経営学の観点から、キャリア開発について隠喩を切り口とした次のような研究が出版されている。加藤一郎、(2004)『語りとしてのキャリアーメタファーを通じたキャリアの構成』 東京：白桃書房。
- (12) 認知言語学におけるコミュニケーションについて研究の現状は大堀 (2004) に詳しく、とくに比喩については大森文子の論文が参考になる。また、語用論 (関連性理論) の観点からのコミュニケーション論としては東森・吉村 (2003) がある。ただし、関連性理論では、隠喩や換喩をloose talkの一種として捉えているので、限界があるといえる。また、換喩のみを扱う研究ではあるが、認知言語学と関連性理論の融合を扱った論文集も出版されている (Panther and Thornburg (2003))。

参考文献

- Barthes, Roland. (1970) "L'ancienne rhétorique: aide-memoire." *Communication* 16. (ロラン・バルト (沢崎浩平 (訳)) (1979/2005)『旧修辞学：便覧』東京：みすず書房。引用は沢崎の訳本から)
- Goossens, Louis. (1990) "Metaphtonymy: the interaction of metaphor and metonymy in expressions for linguistic action." *Cognitive Linguistics* 1, 323-340.
- 東森勲・吉村あき子。(2003)『関連性理論の新展開 認知とコミュニケーション』東京：研究社。
- 廣川洋一。(1984/2005)『イソクラテスの修辞学校』東京：講談社。(講談社学術文庫, 2005)
- 市川浩。(1978)「<身>の構造」田島節夫 他 (編)『講座・現代の哲学② 人称的世界』 東京：弘文堂。
- 市川浩。(1984/1992)「<身>の構造とその生成モデル」 市川浩。『<身>の構造』東京：講談社。(講談社学術文庫, 1992) 所収。
- Lakoff, George, and Mark Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of

- Chicago Press. (G. レイコフ&M. ジョンソン (渡部昇一 他 (訳)) (1986) 『レトリックと人生』
東京：大修館書店.)
- Langacker, Ronald. (1993) "Reference-point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4, 1-38.
- Langacker, Ronald. (1995) "Raising and Transparency." *Language* 71, 1-62.
- 大堀壽夫 (編). (2004) 『認知コミュニケーション論』 東京：大修館書店.
- Panther, Klaus-Uwe, and Linda L.Thornburg (eds.) (2003) *Metonymy and Pragmatic
Inferencing*. Amsterdam: John Benjamins.
- Proctor, Robert N. (1999) *The Nazi War on Cancer*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
(宮崎尊 (訳) (2003) 『健康帝国ナチス』 草思社. 引用は宮崎の訳本から)
- Ruiz de Mendoza Ibanez, Francisco Jose, and Lorena Perez Hernandez. (2003) "Cognitive
Operations and Pragmatic Implication." IN: Panther and Thornburg (2003), 23-49.
- 佐藤信夫. (1992) 『レトリック感覚』 東京：講談社. (講談社学術文庫)
- 瀬戸賢一. (2002) 『日本語のレトリック』 東京：岩波書店. (岩波ジュニア新書)
- 瀬戸賢一 (編著). (2004) 『ことばは味を超える』 東京：海鳴社.
- Sontag, Susan. (1977, 1988) *Illness as Metaphor and AIDS and Its Metaphors*. New York:
Picador/Farrar Straus and Giroux. (富山太佳夫 (訳) 『隠喩としての病い』 『エイズとその隠喩』
東京：みすず書房. 引用は富山の訳本から)
- 鈴木宏昭. (1996) 『類似と思考』 東京：共立出版.
- 谷口一美. (2003) 『認知意味論の新展開』 東京：研究社.
- Williams, Joseph M. (1976) "Synaesthetic adjectives: a possible law of semantic change."
Language 52, 461-478.
- 柳沢浩哉, 中村敦雄, 香西秀信. (2004) 『レトリック探求法 (シリーズ日本語探求法)』 東京：朝倉書
店.